

《醒世姻縁傳》(第30回) 訳注 (其一)

植田均、石亮亮、佐々木奈央、邱杰、王濤、王真、馬旭超、王顯義

要旨

《醒世姻縁傳》は清代初期成書の全 100 回に及ぶ長編章回小説である。作者不詳であるものの、使用する言語の基礎方言から、山東省の人だと判る。我々はこれに訳注をほどこし、今回、新たに[比較]等の項を設け研究成果も取り込む。現在熊本大学近代漢語研究班として「清代北方官話区の代表的作品」の全出現語彙を調査研究しているが、その一環として《醒世姻縁傳》に取り組んでいる。即ち、最終的には「どの語彙が、どのように(意味)、どれだけ(数量)使用されているか」を明らかにする。そして出現回数を数字で表す言語学的計量研究へと結びつけたい。

部分的注釈は、胡適「《醒世姻縁傳》考証」(1933)、黄肅秋(1981)等が役立つ。最近では、晁瑞『《醒世姻縁傳》方言詞歴史演變研究』(2014)、植田均『《醒世姻縁傳》方言語彙辞典』(2016)がある。なお、邦訳は左並旗男『醒世姻縁傳』(兄弟舎、2002)がある。

凡例

一、底本：《重訂醒世姻縁傳》(同徳堂梓)、人民文学出版社影印本(1994年刊)。

二、本稿の構成：一段落ごとに原文、訳注、日本語訳の順に並べた。

なお、中国語の原文が(口語調ではなく)文言である場合、日本語訳も文語調とし、他の箇所と区別させた。

三、文字：《醒世姻縁傳》の文字は、極力底本通りとした。したがって、繁体字が基本で、その中に簡略字が散見される。この結果、繁体字である旧字(正字)と簡略字(当時、民間流行文字も含む)の混合形式とならざるを得ない。例えば“纔//才”“個//个”“裡//裏//里”“喫//吃”“樓//楼”など。

底本(影印本)は、(当時の文字使用状況を反映した)口語資料なので、原文で使用されている字体を可能な限り用いた。よって、日本漢字の正字(旧字)を必ずしも用いていない。例えば“你、並、過”などを用いたのに対して“爾、竝、過”などは用いていない。

また、我々が使用した中国語ソフトのフォントにより、正字(旧字)の字体がうまく表現できていない場合もある。例えば、“為//爲”“蹲//蹲”“敞//敞”“饑//饑”などである。このような場合、本稿では何れも前者を採用している。

なお、《醒世姻縁傳》では“邊、着、赶”を使用し、“邊、著、趕”を殆ど使用していない。

四、日本語訳：日本語訳文は、語彙本来の訳義を考えるため直訳になるよう努めた。

なお、1度注釈した語彙はなるべく重複して取り上げないように努めたが、重複している場合

は、用例を別のものにした。

五、校注の用例：『中国語大辞典』（角川書店、1944）、《〈白话小说语言词典〉》（北京・商务印书馆、2011）等から適宜引用。用例の頭に付す数字は各作品の章回数を示す。

六、略号：[名]名詞、[代]代詞、[動]動詞、[形]形容詞、[量]量詞、[副]副詞、[介]介詞、[助動]助動詞、[接]接続詞、[助]助詞、[嘆]感嘆詞、[連]連語、[接尾]接尾辞、[書]書面語、[方]方言、[口]口語、[文]文言、[慣]慣用語、[成]成語、[諺]諺語、[逆序]逆序語、[同音]同音語、[同義]同義語、[擬音]擬音語、[誤]誤刻、[転]転義、[比較]現代語または類義語との比較等。

《水滸》：《水滸傳》、 《金瓶》：《金瓶梅詞話》、 《聊齋》：《聊齋俚曲集》
 《古今》：《古今小説》、 《恒言》：《醒世恒言》、 《警世》：《警世通言》
 《喻世》：《喻世明言》、 《西遊》：《西遊記》、 《三國》：《三國演義》
 《兒女》：《兒女英雄傳》、 《鏡花》：《鏡花縁》、 《儒林》：《儒林外史》
 《拍案》：《初刻拍案驚奇》、 《紅樓》：《紅樓夢》、 《清史》：《清史演義》
 《二刻》：《二刻拍案驚奇》、 《官場》：《官場現形記》、 《封神》：《封神演義》
 《醒世》：《醒世姻縁傳》、 《宣和》：《宣和遺事》、 《老殘》：《老殘遊記》
 《京本》：《京本通俗小説》、 《三俠》：《三俠五義》、 《清平》：《清平山堂話本》
 《二十》：《二十年目睹之怪現狀》、 《西洋》：《三寶太監西洋記通俗演義》

七、分担：名簿順に1人約200字程度の原文一段落について、語彙注釈及び日本語訳稿を提出。これを皆で検討修正した。何度かの討論修正を経て最終確認したのは植田均である。したがって、誤謬等の全責任を負う。大方のご教示を賜れば幸いである。

原文

求死非難，何必^[1]傷寒^[2]。伐性斧^[3]日夜^[4]追歡^[5]。酒池^[6]沉溺^[7]，誤^[8]却^[9]加餐^[10]。更兼^[11]暴怒^[12]，多計^[13]，少安眠^[14]。病骨^[15]難痊^[16]，死者^[17]誰旋^[18]。臥^[19]成頭^[20]長夢黃泉^[21]。時光^[22]有限^[23]，無計^[24]延年^[25]，還^[26]騎^[27]劣馬^[28]，服毒藥^[29]，打口韉^[30]。

——右調《行香子》

校注

[1] 何必：[副]…する必要があるか、わざわざ…する必要はない。反語文に用いる。《兒女》2：老爺便忍著淚說道：幾天的離別，轉眼便得聚會，～如此。

[2] 傷寒：[名]多く発熱を伴う病気を指す。《水滸》111：穆弘道：虞侯和吳成，各染～時疫，現在莊上養病，不能前來。

[3] 伐性斧：[成]“沉迷女色”女色に熱中する。《老殘》20：浪子金銀～道人冰雪返魂香。

[4] 日夜：[名]“白天黑夜；日日夜夜”日夜、昼夜。《水滸》102：怎禁那婦人因王慶勾搭了嬌秀，～不回，把他寡曠的久了，欲心似火般熾焰起來，怎饒得過他。

[5] 追歡：[動]“寻求欢乐”楽しむ。《紅樓》54：二人自是歡喜，便命人將賈棕賈璜各自送回家去，便約了賈璜去～。

[6] 酒池：[名]酒の池。《封神》98：此是紂王所制薑盆，殺害宮人者；左右正是肉林，～。

[7] 沉溺：[動]“沉迷”溺れる。《三國誌》21：魏書21王衛二劉傳傳21：嘏議以為淮海非賊輕行之路，又昔孫權遣兵入海，漂浪～，略無子遺，恪豈敢傾根竭本，寄命洪流，以儆乾沒乎。

- [8] 誤：[動]“錯誤”間違う。《紅樓》47：又打聽他最喜串戲，且都串的是生旦風月戲文，不免錯會了意，～認他做了風月子弟，正要與他相交，恨沒有個引進。
- [9] 却：[副]“反而；倒”却って、案に相違して、意外な感じを添える、また逆接を示す。
- [10] 加餐：[動]“進餐”食事する。《夢中緣》4：伏願勉力～，千萬保重，勿以妾為深念可也。
- [11] 更兼：[接]“更加上”その上に。《水滸》61：惟此北京，是河北第一個去處：～又是梁中書 統領大軍鎮守，如何不擺得整齊。
- [12] 暴怒：[動]“發怒；生氣”激怒する。《元史》全文註解：103 誌第 51：諸鞫獄輒以私怨～，去衣鞭背者，禁之。
- [13] 計算：[動]“算計；暗算”秘かに他人を陥れようと企む。《兒女》12：只是我～，多也不過二千余金呢，終究還不足數。
- [14] 安眠：[動]“安然熟睡”安眠する。《紅樓》109：起初再睡不著，以後把心一靜，誰知竟睡著了，却倒一夜～。
- [15] 病骨：[名]“多病瘦損的身軀”病氣の身体。《封神》28：穿戶透簾侵～，妖氛怪氣此中藏。
- [16] 痊：[動]“病好了；恢復健康”病氣が治る。《拍案》11：不想那阿虎近日傷寒病未～，受刑不起：也只為奴才背主，天理難容，打不上四十，死於堂前。
- [17] 死者：[名]“死去的人”死んだ者。《春秋戰國・列子》：貧者士之常也，～人之終也，處常得終，當何憂哉。
- [18] 旋：[動]“返回；死而復生”戻る、生き返る。《漢書》25：復留，二十四日三分而～。
- [19] 卧：[動]“躺”横になる、寝る。《子部・論衡》9：毀行之人，晝夜不～，安足以成善。
- [20] 成頭＝床頭：[名]“床的一端”枕元。《水滸》5：將戒刀放在～，禪杖把來倚在床邊。
- [21] 長夢黃泉：[連]“死去；去世”死ぬこと。
- [22] 时光：[名]“時間”時間。《敦煌變文集三》：更欣廣申贊嘆，恐度～，不及子細談揚，以下聊陳懺悔。
- [23] 有限：[形]有限である、限りのある。《官場》10：辦好的機器如果能通，就是貼點水脚，再罰上幾個，都還～；倘或實在退不掉，沒有法，也只好吃虧買下來。
- [24] 無計：[動]“沒有辦法；沒法”できない、仕方がない。
- [25] 延年：[動]“延長壽命”壽命を延ばす。《漢書・酷吏傳》60：後左馮翊缺，上欲征～，符已發，為其名酷復止。
- [26] 還：[副]“再；又”また、さらに。《兒女》11：他～說請列位看他這張彈弓分上，借我兩頭牲口，～請兩位壯士一直護送我們到淮安地面。
- [27] 騎：[動]“跨坐；乘坐”跨る、跨って乗る。《老殘》8：到了平陰，換了兩部小車，推著行李，在縣裏要了一匹馬～著，不過一早晨，已經到了桃花山脚下。
- [28] 劣馬：[名]“性情暴烈，不易馴服的馬”手に負えない暴れ馬。《水滸》84：世本朔方，養大能騎～。
- [29] 服毒藥：[連]“吞服毒藥”服毒する。
- [30] 打口韃＝打秋千：[連]ブランコに乗ってゆらゆら揺れる。□の文字が不明であるが、意味から明らかに“秋千//鞦韆”（ブランコ）となる。《二刻》18：忽見了這件～的物事，吃了一驚，慌忙解放下來，早已氣絕了的。

日本語訳

死を求むるは難きに非ず、何ぞ傷寒を病むこと必せん。性を伐る斧は日夜追歎す。酒池に沈溺し、

誤って却って餐を加う。更に兼ねて暴怒し、策略多ければ、安らかに眠ること少なし。病骨は痊難く、死なる者は誰にか旋る。床頭に臥し長く黄泉を夢みる。時光限りあり、年を延ばす計なし。また劣馬を騎し、毒薬を服す。梁に懸かり秋遷とす。

——右调《行香子》

原文

再說^[1]晁源的娘子^[2]計氏^[3]，從那一年受屈^[4]吊死^[5]了，到如今^[6]不覺^[7]又是十二个年頭^[8]。原來^[9]那好死^[10]的鬼魂^[11]隨死隨即^[12]托生^[13]去了。若是^[14]那樣^[15]投河^[16]跳井^[17]服毒^[18]懸梁^[19]的，內中^[20]又有分別^[21]。

校注

[1] 再說：[副] さて。旧白話小説の発話の語。《官場》8：～陶子堯的太太早不來、晚不來，偏偏也趕著這一天到了上海。

[2] 娘子：[名] “妻子；老婆” 妻、女房。《兒女》14：褚家～道：他老人家雖說是這等脾氣，却是吃順不吃強，又愛戴個高帽兒。

[3] (計)氏：[名] 既婚女性の呼称。通常は実家の姓をつける。《紅樓》11：秦～聽了笑道：這裏還不好，往那裏去呢。

[4] 受屈：[動] “受委屈” 無実の罪を着せられる。《封神》32：將軍若念飛虎～，此一去倘有得地，決不敢有忘大恩也。

[5] 吊死：[動] “上吊而死” 首を吊って死ぬ。《晉書》王詮謂之曰：知死～，何必見生。

[6] 如今：[名] “現在” (遠い過去と対比しての)今。《紅樓》78：我這～是天上的神仙來請，那裏捱得時刻呢。

[7] 不覺：[副] “不知不觉；没想到” 思わず、あっという間に。《抱樸子》外篇：終於～，不忍黜斥，猶加親委，冀其晚效。

[8] 年頭：[名] “年份” (足かけ…)年。《儒林》1：看看三個～，王冕已是十歲了。

[9] 原來：[副] もともと。《二十》2：～我母親將銀子一齊都交給伯父帶到上海，存放在妥當錢莊裏生息去了，我一向未知。

[10] 好死：[動] 良い死に方をする。《官場》44：我想這人一定不得～，將來還要斷子絕孫哩。

[11] 鬼魂：[名] 死者の魂、靈魂。《紅樓》13：這四十九日，單請一百零八眾僧人在大廳上拜大悲懺，超度前亡後死～；另設一壇於天香樓，是九十九位全真道士，打十九日解冤洗業醮。

[12] 隨死隨即：[連] “死了之后立即…” 死ぬとすぐに…。

[13] 托生：[動] “转世；转生” 転生する。《敦煌變文集》4：向於波斯匿王宮內～，此是布施因緣，得生於國王之家。

[14] 若是：[接] “如果；要是” もしも。《二十》5：～要想哪一個缺，只要照開著的數目，送到裏面去，包你不到十天，就可以掛牌。[比較] “若” は以前[yào]とも読音した。

[15] 那樣：[代] そのような、そのように、あのような、あのように。《兒女》8：但是從炕上跳上～大一個人來，再沒說看不見的。

[16] 投河：[動] “跳河” 川に身を投げる。《牡丹亭》17：幾番待懸梁，待～，免其指斥。

[17] 跳井：[動] “投井” 井戸に身を投げる。[比較] 上記の“投河”もこの“跳井”も自殺を表す。《紅

樓》33：賈政聽了，驚疑問道：好端端，誰去～。

[18] 服毒：[連]“喝毒药” 毒薬を飲む。《喻世》39：一杯熱酒難當，汪革今日將熱酒～，果應其言矣。

[19] 懸梁：[動]“自縊；上吊” 首を吊って死ぬ。[比較] 上記の“服毒”もこの“懸梁”も自殺を表す。《狐狸緣全傳》22：惟這不得其死，夭年暴亡，或是著槍中箭，或是自刎～，一旦的冤怨未明，這口氣凝倩住，再也不能解化的。

[20] 内中：[名]“里头；其中” 内部。《二刻》13：那一幹如狼似虎的人…把箱籠多搬到官面前來。～一箱沈重，知縣叫打開來看。

[21] 分別：[名]“區別” 區別、分別、違い。《二十》69：我道：這又有甚麼～。

日本語訳

さて、晁源の女房の計氏が無実の罪を着せられ首を吊ってから、十二年が過ぎた。元來良い死に方をした者は、死ぬとすぐに生まれ変わることができるものである。もし河に身を投げたり、或いは井戸に飛び込んだり、毒を飲んだり、或いは首を吊ったりした者たちは、死後、それぞれ分別される。

原文

若是那樣忠臣^[1]，或是^[2]有甚麼賊寇^[3]圍了城，望那救兵^[4]不到，看七的城要破了；或是已被賊人拿住^[5]，逼勒^[6]了要^[7]他投降^[8]，他却不肯^[9]順從^[10]，乘空^[11]或是投河跳井，或是上吊抹頭^[12]。

校注

[1] 忠臣：[名]“忠厚正直的臣子” 忠実である官吏。《韓非子・十過篇》：過而不聽於～，獨行其意，則滅其高名為人笑之始也。

[2] 或是：[接] 或いは。ここでは“或是…或是…”の構文。《紅樓》4：咱們這進京去，原是先拜望親友，～在你舅舅處，～你姨父家，他兩家的房舍極是寬敞的。

[3] 賊寇：[名]“強盜；入侵的敵人” 強盜。《水滸》1：自此，史進修整門戶墻垣，安排莊院，拴束衣甲，整頓刀馬，提防～，不在話下。

[4] 救兵：[名]“援兵” 援兵。《儒林》43：我看賊苗雖敗，他已逃往別洞，必然求了～，今夜來劫我們的營盤。

[5] 拿住：[動]“抓住” 捕まえる。《封神》92：吾今日到此，快快下馬納降，各還故土，尚待你等以不死；如有半字不然，那時～，定碎屍萬段，悔無及矣。

[6] 逼勒：[動]“逼迫；強迫” ゆずる、強要する。《警世》12：巧媳婦煮不得沒米粥，百姓既沒有錢糧交納，又被官府鞭笞～，禁受不過，三三兩兩，逃入山間，相聚為盜。

[7] 要：[動]“使；让；叫” …させる。《二十》70：宗生道：我這回進京，滿意要見焦侍郎，代小兒求一封信，謀一個館地。

[8] 投降：[動]“向对方屈服” 投降する。《拍案》31：張天祿，祝洪等慌了，都來～，把一幹人犯，解到府裏監禁，聽候發落。

[9] 不肯：[連] …しようとしな。《金瓶》11：～做哩。

[10] 順從：[動]“順服；服从” 従順する、おとなしく従う。《警世》11：到此地位，不由不～，不要愁煩，今夜若肯從順，還你終身富貴，強似跟那窮官。

[11] 乘空：[動]“乘間” 機に乗じる。《平山冷燕》18：樓門口並無人看守，故張寅～竟走了上來。

[12] 抹頭：[動]“砍頭” 刀で首を切る。[比較]“砍頭”は一般に他人に首を切られる事を指すが、“抹

头”は自ら切る。《兒女》4：公子點了點頭，驢夫把驢子帶了一把，街心裏早有那招呼那買賣的店家迎頭用手一攔，那長行驢子是走慣了的，便一～一個跟一個的走進店來。

日本語訳

もしも忠臣なら、賊に城を囲まれたとき援兵がやって来なければ、見る見るうちに城は陥落してしまい、或いはすでに賊の手に落ち、投降を迫られても、従おうとせず、隙を見て川に身を投げたり、井戸に飛び込んだり、首を吊ったり、または首を切ったりする。

原文

這樣的男子^[1]，不推^[2]托生^[3]，還要用他爲神，那伍子胥^[4]不是使牛皮^[5]裹^[6]了撩^[7]在江裏死的。屈原^[8]也是自己赴江^[9]淹死^[10]，一个做了江神^[11]一个做了河伯^[12]。那于忠肅合岳鵬舉都不是被人砍了頭^[13]的。一个做了都城隍^[14]，一个做了伽藍菩薩^[15]。

校注

[1] 男子：[名]“男人；男性的成年人”男。《兒女》8：要講他這種胸襟，這番舉動，就讓是個血性～也作不來。

[2] 不推＝不惟：[接]“不仅；不但”…だけではない。《東坡文集》60：～安慰人心，破奸雄之謀，亦使蓄積之家，知不久官米大至，自然趁時出賣，所濟不少。

[3] 托生：[動]“转世；投胎”転生する。《古詩十九首・西北有高樓》：高樓雲雲，全從虛念中～，故突兀而起，孤清不群，而且浮雲縹緲。

[4] 伍子胥：[名] 春秋末期の人。生没年不明。名は員。楚国のお家騒動で父と兄とを楚の平王に殺されると、楚より出奔し、諸国を彷徨った後、呉に身を寄せた。呉王の闔閭が父王を殺して即位するのに力を貸して信任を受け、兵法家の孫武と共に呉の国力の充実に努めた。国力を伸ばした呉は、楚に侵攻し、楚都の郢を陥れた。伍子胥は、すでに死んで葬られていた平王の墓を暴き、その尸を鞭打って父と兄の仇を討ったとされる。

[5] 牛皮：[名] 牛の皮。多くは既になめしたものを指す。《西遊》25：眾仙即忙取出一條鞭，不是甚麼～，羊皮，麂皮，犢皮的，原來是龍皮做的七星鞭，著水浸在那裏。

[6] 裹＝裹：[動]“包住；包”包む。《二十》44：傳了帖子進去，繼之夫人相見時，便有點疑心，暗想他是旗人，為甚～了一雙小脚，而且舉動輕佻，言語鶻突，喜笑無時，只是不便說出。

[7] 撩：[動]“掀起；揭起”置く。[同義]“撻”。《紅樓》105：這些番役都～衣奮臂，專等旨意。

[8] 屈原：[名] 戦国時代の楚の政治家、詩人。當時を代表する詩人であり、政治家としては秦の張儀の謀略を見抜き踊らされようとする懷王を必死で諫めたが受け入れられず、楚の将来に絶望して入水自殺した人物。

[9] 赴江：[連] 江に赴く。

[10] 淹死：[動]“溺死”溺死する。《紅樓》38：誰知那日一下子失了脚掉下去，幾乎沒～，好容易救上來了，到底叫那木釘把頭碰破了。

[11] 江神：[名]“统治江の神仙”川の神様。《地藏經》：復有他方國土，及娑婆世界，海神，～，河神，樹神，山神，地神，川澤神，苗稼神，晝神，夜神，空神，飲食神，草木神，如是等神，皆來集會。

[12] 河伯：[名]“传说中的河神”川の神。《醒世》26：只有少府是金色鯉魚，所以各處的都推他為首，同見～。

[13] 砍(了)頭：[動]“杀头”首を切る。《西遊》46：行者道：我當年在寺裏修行，曾遇著壹個方上禪和子，教我一個～法，不知好也不好。

[14] 都城隍：[名]“守护城池的神”城壁を守る神。《拍案》18：然後忽一夜夢見裴使君來拜道：某任～已滿，乞公早赴瓜期，上帝已有旨矣。

[15] 菩薩：[名]“人们崇拜的神灵偶像”仏と神。

日本語訳

このような男子は、ただ生まれ変わるばかりでなく、更に、神にもなり得る。例えば、伍子胥は牛の皮に包まれて江に投げ込まれて死に、屈原も自ら江に赴いて溺死した。一人は江神となり、一人は河伯となった。于忠肅と岳鵬拳はどちらも人に首を切られたのではないけれども、一人は城隍神になり、もう一人は伽藍の菩薩になった。

原文

就是文七山^[1]丞相元朝極要拜他爲相，他抗節不屈^[2]，住在一間樓上飲食^[3]便溺^[4]都不走下樓來。只是叫殺了他罷，那元朝□□^[5]傲他不過^[6]，只得^[7]依了^[8]他的心志^[9]，綁^[10]到市上^[11]殺了。死後他爲了神，做了山東布政司的土地^[12]。

校注

[1] 文七山：[名] 文天祥。南宋末期の軍人、政治家。字は宋瑞又は履善。号は文山。滅亡前の宋の臣下として戦い、宋滅亡後は元に捕らえられ元に仕えるようにと勧誘されたが忠節を守る為に断って自ら刑死した。張世傑、陸秀夫と並ぶ南宋の三忠臣（亡宋の三傑）の一人。

[2] 抗节不屈：[成] 節操が高く屈しない。《清史稿》399：詔嘉其～，遇害甚慘，贈内閣學士，入祀京師及安徽，江蘇昭忠祠，予騎一都尉世職。

[3] 飲食：[動]“吃喝”食事する。《紅樓》83：瞧了寶玉，不過說～不調，著了點兒風邪，沒大要緊，疏散疏散就好了。

[4] 便溺：[動]“排泄尿尿”大小便する。《雲笈七籤》40：凡修上清之法，不得北向及本命之上二處～，觸忤玉晨，穢慢本真。

[5] □□=畢竟：[副]“終归；终究；到底”結局のところ。□□の2文字が不明で、他の版本とも照合、意味的に“畢竟”とした。[比較]“毕竟”は疑問文に用いないが、“到底”は用いることができる。《官場》52：尹子崇雖然學問不深，～聰明還有，看了這樣，便曉得老丈是因為年紀大了，精神不濟的原故；這件事倒很可以拿他蒙一蒙。

[6] 傲他不過：[連]“傲不過他”屈服させることはできない。[比較] 漢字が類似。

[7] 只得：[副]“只好”仕方なく。《清平》五戒：清一推拖不過，～走到山門邊。

[8] 依(了)：[動]“依照；按照”(…に)従う。《紅樓》19：你要果然都～，就拿八人轎也擡不出我去了。

[9] 心志：[名]“意志；志气”意志、精神。《三國》55：盛為築宮室，以喪其～；多送美色玩好，以娛其耳目。

[10] 綁：[動]“捆；縛”縛る、くくる。《二十》104：良夫人又喝叫把棉褲也剝了。才叫把他～了，喝叫帶來的家人包旺。

[11] 市上：[名] 処刑場。

[12] 土地：[名] 一つの小地区を治めている神、村の守り神。《荀子王霸篇》：取天下者，非負其～而

從之之謂也，道足以一人而已矣。

日本語訳

また文天祥丞相は、元の朝廷がぜひ宰相にしようとしたが、屈せず、二階の一部屋で軟禁状態の如く生活し、食事、用便のときすら二階からは降りず、ひたすら「殺せ！」と叫んだ。元朝は結局彼を屈服させることはできず、彼の意思に従い、縛って処刑場に連れて行き、殺した。死後、彼は神となり、山東布政司の土地神となった。

原文

一年間^[1]、有一位方伯^[2]久任^[3]不陞^[4]，又因一个愛子^[5]生了个眼瘤^[6]，意思^[7]要請告^[8]回去^[9]。請了一个術士^[10]扶鸞^[11]，焚誦^[12]了符咒^[13]，請得^[14]仙來降了壇^[15]，自寫是本司^[16]土地宋丞相文天祥^[17]，詳悉^[18]寫出自己許多^[19]履歷^[20]，與史上也不甚相遠^[21]，叫^[22]方伯不要請告，不出^[23]一月之内，自^[24]轉本省巡撫，又寫了一个治眼瘤的方^[25]。

校注

[1] 一年間：[連]“有一年”ある年。

[2] 方伯：[名] 諸侯を指す。殷・周から漢の初めまで帝王の支配下にあった列国の君主に対する総称。《聊齋》：宦娘：臨邑劉～之公子，適來問名，心善之，而猶欲一睹其人。

[3] 久任：[連]“長期担任”長く仕事や職務を担当する。

[4] 陞：[動] 等級が上がる。《兒女》1：見世上那些州縣官兒，不知感化民風，不知愛惜民命，講得是走動聲氣，好弄銀錢，巴結上司，好謀～轉。

[5] 愛子：[名]“喜爱的儿子”可愛がっている息子。《紅樓》104：我在家聽見說老親翁有個銜玉生的～，名叫寶玉，因與小兒同名，心中甚為罕異。

[6] 眼瘤：[名]“眼部生长的赘生物”眼部の腫瘤。

[7] 意思：[名]“打算”考え、旨。《兒女》8：我本來的～，原是得了那驢夫口裏一個信息，要擊這註現成銀子。

[8] 請告：[動]“上报；报告”報告する。《明史》294：列傳182：積勞得疾，～歸卒。

[9] 回去：[動] 帰る。《兒女》6：只見那女子兩只小脚兒拳～，踢一跳，便跳過那棍去。

[10] 術士：[名] 道教の僧。《聊齋》：～作壇，陳設未已，忽顛地下，血流滿頰；視之，割去一耳。

[11] 扶鸞：[動]“道教的一种占卜方法”道教の占術の一つ。《紅樓》4：老爺只說善能～請仙，堂上設了乩壇，令軍民人等祇管來看。

[12] 焚誦：[動]“焚香诵经”線香をあげ、お経を唱える。《聊齋》1：廟中道士任姓，每雞鳴輒起～。

[13] 符咒：[名]“符箓和咒語的合称”道教の護符や呪文。《紅樓》64：芳官竟是個狐狸精變的，就是會拘神遣將的～也沒有這麼快。

[14] 得：[助] 完了を表す。[比較]“了”“着”に近い働きをする。《二十》44：下～轎來，對我看了一眼，便把眼鏡摘下。

[15] 降壇：[動] 道士が法術の作法を終える。《儒林》7：那日晚生曉得老先生到庵，因前三日純陽老祖師～，乩上寫著這日午時三刻有一位貴人來到，那時老先生尚不曾高發，天機不可洩漏，所以晚生就預先回避了。

[16] 本司：[名]“教坊司”明代に設けられた機関。音楽歌舞または官妓の管理も行う。《紅樓》101：

依～的意思，定要辦你個罪名。

[17] 文天祥：[名] 宋末の政治家、学者。

[18] 詳悉：[形] “详尽” 詳しい、詳細である。《水滸》94：宋江～來書，與吳用計議，按兵不動，只看關內動靜，然後策應。

[19] 許多：[形] “很多”（量的に）多い。《兒女》8：只見他滿臉通紅，說道：這也顧不及～了，姑娘，你務必借我一用。

[20] 履歷：[名] “经历” 経歴。《兒女》1：及至引見，到了老爺這排，奏完～，聖人往下一看，見他正是服官政の年紀，臉上一團正氣，胸中自然是一版至誠。

[21] 不甚相遠：[連] “差距不大” 大差ない。《重修（袁可立）始祖榮公遺像記》：族人有能寫照者甚少，猶見於康熙癸亥同族懲恧之，俾共追寫，寫成質之族人齒尊者，曰：相去～。

[22] 叫：[動] “让” …させる。《兒女》8：當下只收了他一匹驢兒，此外不曾受他一丝一粒，只～他在這上不在天下不著地的地方，給我結了几間茅屋，我同老母居住。

[23] 不出：[連] “不超过” 一定の時間を超えない。《紅樓》49：我們也不用找，只管前頭去，～三日包管就有了。

[24] 自：[副] 自分で。《紅樓》82：黛玉道：我在這裏情願自己做個奴婢過活，～做～吃也是願意。

[25] 方：[名] “合成药物的配方” 処方箋。《紅樓》3：請了多少名醫修～配藥，皆不見效。

日本語訳

ある年、ある方伯は長く任に就いていたが昇進できなかった。更に、愛息の眼部に腫瘤ができたので、辞任して故郷の家に帰ろうと考えた。そこで道士を招き占いをさせた。呪文の紙を燃やし、神様に降壇を請う。神様は自ら「われは本司（この地）の土地神、南宋の丞相文天祥なり」と書いた。詳細な履歴は史書の記載と比べ、さほど差がなかった。方伯に辞任報告はなく、一ヶ月以内に、すぐ本省の巡撫に転出すると告げ、更に眼部腫瘤を治す処方をも書き記した。

原文

果然^[1]歇不得^[2]幾日，山東巡撫陞了南京兵部尚書^[3]，方伯就頂^[4]了巡撫^[5]坐位^[6]。依了^[7]他方修合^[8]成湯藥，煎來洗眼^[9]，不兩口^[10]那眼瘤通^[11]長好了。再說那張巡、許遠都是自刎^[12]了頭尋死^[13]，都做了神靈^[14]。若是^[15]那關老爺^[16]，這是人所皆知^[17]，更不必絮煩說得^[18]。

校注

[1] 果然：[副] “果真” 思った通り。《清平》洛陽：去床頭看時，～有個大窟窿。

[2] 歇不得：[動] 経ないうちに。《喻世》38：～兩日，又去相會，正是情濃似火。

[3] 尚書：[名] 官名。明清時代、六部の長官を指した。秦代は、宮中で文書発送を司る。本来、補佐的な役割も、後漢の初めから次第に重要なポストとなる。《紅樓》92：因又笑說道：幾年間，門子也會鑽了，由知府推升轉了禦史，不過幾年，升了吏部侍郎，兵部～。

[4] 頂：[動] “頂名代替” 取って代わる。《儒林》45：恐系外鄉光棍～名冒姓，理合據實回明，另輯審結雲雲。

[5] 巡撫：[名] 官名。明代では臨時に地方に派遣し、民政や軍政を巡視、監督する大臣を指した。清代では、一省の民政、軍政をとりしきる常設長官を指す。《兒女》18：朝廷見他強幹精明，材堪大用，便放了四川～。

- [6] 坐位：[名]“名次；地位”順位、地位の席。[同音]“座位”。
- [7] 依(了)：[動]“依照；按照”(…に)従う。《紅樓》19：你要果然都～，就拿八人轎也擡不出我去了。
- [8] 修合：[動]“指中药的采集，加工，配制过程”漢方薬を作る過程の行為。《金瓶》19：初時蔣竹山圖婦人喜歡，～了些戲藥，買了些景東人事，美女想思套之類，實指望打動婦人。
- [9] 洗眼：[動]“清洗眼睛”眼を洗う。《太平禦覽》：《述仙記》曰：八月一日作五明囊，盛取百草頭露，以之～，眼明也。
- [10] 不兩口：[連]“不兩日，指非常短的时间内”少ない時間。[比較]“日”の横棒カスレ。《拍案》32：～，胡生死了，鐵生吊罷歸家，狄氏念著舊情，心中哀痛，不覺掉下淚來。
- [11] 通：[副]“整個；全部”完全に、全部。《師說》：皆～習之。
- [12] 自刎：[動]“自杀”自ら首をはねて死ぬ。《醒世》30：再說那張巡，許遠都是～了頭尋死，都做了神靈。
- [13] 尋死：[動]“企图自杀”自殺する。《二刻》26：高文明道：不去也憑得伯伯，何苦～。
- [14] 神靈：[名] 神の総称。《拍案》24：登了此峰，西湖如享，長江如帶，地勝～，每年間人山人海，挨擠不開的。
- [15] 若是：[接]“如果”もしも。《二十》5：～要想哪一個缺，只要照開著的數目，送到裏面去，包你不到十天，就可以掛牌。
- [16] 閔老爺：[名] 閔羽に対する尊称。
- [17] 人所皆知：[成]“尽人皆知”皆が知っている。
- [18] 得：[助] 文末に置かれ、陳述の語気を表す。多く肯定文に用いられる。

日本語訳

果たして、何日もしないうちに山東の巡撫が南京の兵部尚書に栄転した。方伯は代わりに巡撫となった。そして、かの処方により漢方薬を調合して煎じ薬を作り、それを使って眼部を洗うと、たちまちのうちに腫瘍がすっかり治った。さて、唐代の張巡、許遠二人とも（安祿山の乱で）自刎したが、死後に神となった。これが、もしも、『三国志』の閔羽の事ならば、誰もが知る神様になっているので、更に煩わしく申し上げることもなかろう。

原文

如^[1]那婦人中，守節爲重，性命爲輕^[2]，惟恐^[3]落在人手^[4]，汚^[5]了身體^[6]，或^[7]割^[8]或吊^[9]，或投崖^[10]，或赴井^[11]。立志^[12]要完名全節^[13]。如岳家的銀瓶小姐，父兄^[14]被那奸賊^[15]秦檜^[16]誣枉^[17]殺了，恐怕^[18]還要連累^[19]家屬^[20]，赴井而^[21]亡^[22]。

校注

- [1] 如：[接]“比如”例を挙げると、例えば。《官場》23：～要釋放他父親也甚容易，除每年捐錢三百吊之外，另外叫他再捐二千吊，立刻繳進來為修理衙署之費。
- [2] 守節爲重，性命爲輕：[熟] 女性の貞潔は命より重要。
- [3] 惟恐：[動]“只怕；就怕”…をひたすら恐れる。《紅樓》102：一日，賈赦無事，正想要叫幾個家下人搬住員中看守，～夜晚藏匿奸人。
- [4] 落在人手：[連] 他人に支配される状況に落ちる。
- [5] 汚：[動] 汚す。《風流悟》2：不道被他捉我去，要～我，被我哄他有沙淋病，待好了順你，因此得免。

- [6] 身體：[名]“身体”体。[比較]“身体”は体の状態も含む。“身躯”は体、体格を表す。《清平》楊温：～覺得病起來，在店中倒了半個月。
- [7] 或：[接]“或者”あるいは。《紅樓》4：他母親道：何必如此招搖。咱們這次進京去，原是先拜望親友，～是在你舅舅處，～是你姨父家，他兩家的房舍極是寬敞的。
- [8] 割：[動]“杀”殺す。《警世》14：從嫁錦兒，因通判夫人妒色，吃打了壹頓，因恁地自～殺，他自是割殺的鬼。
- [9] 吊：[動]“上吊”首を吊る。《儒林》54：不由分說，向虔婆大哭大罵，要尋刀刎頸，要尋繩子上～，發都滾掉了。
- [10] 投崖：[動]“跳崖”崖から飛び降りる。《金瓶》57：咦，老檀越，你若幹了這件功德，就是那老瞿曇雪山修道，迦葉尊散發鋪地，二祖師～飼虎，給孤老滿地黃金，也比不得你功德哩。
- [11] 赴井：[動]“投井”井戸に身を投げる。
- [12] 立志：[動]“下定決心”決心する。《拍案》27：高公稱嘆道：難得這樣～的女人。
- [13] 完名全節：[連]“保全名節”貞節を守る。
- [14] 父兄：[名][書]“父亲和哥哥”父兄。《兒女》32：～失教，子弟不堪。
- [15] 奸賊：[名]“奸臣”奸臣。《警世》4：荊公舉手與老叟分別，老叟笑道：老拙自罵～王安石，與官人何幹，乃怫然而去。
- [16] 秦檜：[名]南宋の有名な奸臣。
- [17] 誣枉：[動]“诬陷冤枉”無実の罪を着せる。《拍案》6：慧澄道：是一個少年官人，因仇家～，失了宜職，只求一關節到吏部辨白是非，求得復任，情願送此珠子。
- [18] 恐怕：[動]“担心”心配する。《官場》23：他寫這封回信的時候，黃河還沒有開口子；如今出了這個岔子，我們私底下講講不妨，若照這封信上，河帥的事情～不妙。
- [19] 連累：[動]巻き添えにする。《儒林》9：為你這兩個人，～我一頓拳打脚踢。
- [20] 家属：[名]家族。家庭内の戸主以外の成員、また当人以外の成員を指すこともある。[比較]“家族”は同一血統所属の何代かの者。《西游》35：縱放～為邪，該問個鈴束不嚴的罪名。
- [21] 而：[接][書]單語と單語、句と句を繋ぎ、並列・順接・逆接等の關係を結ぶ。ここは順接。
- [22] 亡：[動]“死”死ぬ、亡くなる。

日本語訳

女性の貞潔は命よりも重要で、もし人の手に落ちたならば、身体を汚されることを恐れ、手首を切るか、首を吊るか、崖から飛び降りるか、井戸に身を投げるにより貞潔を守ろうと志を立てる者がいる。例えば、岳家の銀瓶お嬢さんは、父と兄が奸臣秦檜に無実の罪を着せられ、殺された。お嬢さんは家族までもが更に巻き添えになるのを恐れて、井戸に身を投げて死んだのである。

原文

那時小姐^[1]纔^[2]得^[3]一十三歲，上帝^[4]憐^[5]他的節孝^[6]，冊封^[7]了青城山主^[8]夫人^[9]。一个夏侯^[10]氏^[11]，是曹文叔的妻^[12]，成親^[13]不上^[14]兩年，曹文叔害病^[15]死了。

校注

- [1] 小姐：[名]お嬢さん、令嬢。《清平・風月瑞仙亭》：女使春兒見～雙眉愁蹙。
- [2] 纔：[副]“刚”今しがた、たったいま。《醒世》10：我～摸時，並無一些汗氣。

- [3] 得：[動]“有；到”。…になる。《兒女》1：只是他家人丁不旺，安老爺夫妻二位子息又遲，儒人以前生過幾胎，都不曾存下，直到三十以後，才～了一位公子。
- [4] 上帝：[名]“天帝。中國古代指天上主宰宇宙萬物的神”天、神；中國古代において、天上で萬物を主宰する神。《水滸》1：奏聞～。
- [5] 憐：[動]“哀怜；怜悯”憐れむ。《醒世》4：你若～我。
- [6] 節孝：[動]“女子守节操；孝敬公婆”女子が節操を守り舅・姑によく仕える。
- [7] 冊封：[動]“古代帝王以封爵授給貴妃，親王，世子，藩国等”冊封する。
- [8] 主：[名]“权力或財物的所有者”権力或は財貨の所有者。
- [9] 夫人：[名]“妻子的通称”妻の通称。《紅樓》16：賈母率領邢、王二～並尤氏。
- [10] 夏侯：[名]“复姓之一”夏侯という複姓。
- [11] 氏：[名] 姓、氏。
- [12] 妻：[名]“妻子”妻。《紅樓》44：～不如妾，妾不如偷。
- [13] 成親：[動]“结婚”結婚する。《元曲・寶娥冤》1：至十七歲與夫～。
- [14] 上：[動]“到；到达”ある数量に達する。《清平・快嘴》：不～三年之内。
- [15] 害病：[連]“生病；得病”病気になる。《元曲・寶娥冤》2：如今那老婆子～。

日本語訳

この時お嬢さんは十三歳の少女に過ぎなかったが、上帝は彼女の節と孝を哀れみ、青城山主の夫人に冊封した。また、夏侯氏は曹文叔の妻で、結婚して二年足らず、夫の曹文叔は病死してしまった。

原文

夏侯氏の親^[1]叔説他年小，又沒有兒子，守滿了孝^[2]，要他改嫁^[3]，他哭了一晝夜^[4]，蒙^[5]被^[6]而^[7]臥^[8]，不見^[9]他起來，揭^[10]被^[11]一看^[12]，他將^[13]刀刺死^[14]在^[15]内^[16]，上帝封^[17]了禮宗夫人，協同^[18]天仙聖母主管^[19]泰山。

校注

- [1] 親(叔)：[素]“亲生；嫡亲”血統の一番近い、実の。《清平・快嘴》：我是你的～妹妹。
- [2] 守孝：[動]“尊亲死后，服満以前，居住在家，拒絕娱乐和交际，以示哀思”親の喪に服する。《清平・勿頸》：這婦人不免～三年。
- [3] 改嫁：[動](女性が)再婚する。《古今》40：又無處著落，合該教他～。
- [4] 晝夜：[名]“白天和黑夜”四六時中、昼と夜。《紅樓》1：因此～啼哭。
- [5] 蒙：[動]“覆盖”被せる、覆い隠す。《紅樓》25：通靈玉～蔽遇雙真。
- [6] 被：[名]“被子”掛け布団。《金瓶》5：你却把～一蓋。
- [7] 而：[接]並列・順接を表す。《紅樓》1：同那道人飄然～去。
- [8] 臥：[動]“睡；躺”寝る、伏す。《紅樓》1：只願他們當那醉淫飽臥之時。
- [9] 見：[動]“看见”見る、目にふれる。《紅樓》1：因～上面雖有些指奸責佞惡誅邪之語。
- [10] 揭：[動]“掀起”(上方へ)とる、あける。《紅樓》34：走至鏡臺～起錦袱一照。
- [11] 被：[名]“被子”掛け布団。《金瓶》5：你却把～一蓋。
- [12] 看：[動]“看见；瞧”見る、目にふれる。《紅樓》34：太太心疼，就是我們～著。
- [13] 將：[動]“拿；用；把”…を持つ。《二十》61：穿一件缺襟箭袖袍子，却～袍脚撩起，掖在腰帶上面。

[14] 刺死：[動]“尖的東西插入杀死” 刺し殺す。

[15] 在：[介]（ある場所）で、に。《紅樓》34：何不～外頭大事上做工夫。

[16] 内：[名]“里面；里头” 内部、内側。《紅樓》34：心～著實感激激叙。

[17] 封：[動]封ずる。《紅樓》16：說咱們家的大姑奶奶～爲鳳藻宮尚書。

[18] 協同：[動]“協助；配合” 共同する、協力している。《比目魚・奏捷》：若果然是他，只消～地方，拿來就是了。

[19] 主管：[動]“主持管理” 主管する、責任を持って管理する。《夢梁錄・内司官》：内官散祇候，不記多數，各有所轄職名，～事務。

日本語訳

夏侯氏の叔父は、彼女が一昼夜泣き続け、寝台に上り布団を被り起き出してこないのを、掛け布団をあけて見ると、刀で自らを刺して既に死んでいた。上帝は礼宗夫人に封じ、天仙聖母と共に泰山を司らせることにした。

原文

一个王貞婦^[1]，臨海縣^[2]人，被^[3]賊^[4]拿住，過^[5]青風嶺^[6]，他乘間^[7]投崖而^[8]死，上帝冊封爲青風山夫人。像^[9]這樣的男子^[10]婦人^[11]，雖然^[12]死于非命^[13]，却^[14]那英風^[15]正氣^[16]比^[17]那死于正命^[18]的更自^[19]不同^[20]。

校注

[1] 婦：[名][書] 女性。

[2] 臨海県：[名] 浙江省の台州府。

[3] 被：[介]“受；让” …される。《金瓶》2：～上司尋了個空隙。

[4] 賊：[名]“对国家、人民造成严重危害的人” 悪人，賊。《紅樓》1：～盜蜂起，官兵剿捕。

[5] 過：[動]“经过”（場所を）通過する、通る。《紅樓》16：不用～我們那邊去。

[6] 青風嶺：[名] 浙江省紹興府嵊山にある嶺。

[7] 乘間：[動]“乘隙” 機会に乗ずる。《警世》9：高力士見四下無人～奏道。

[8] 而：[接] 並列・順接を表す。《紅樓》1：同那道人飄然～去。

[9] 像：[動] …如き、…のような。《兒女》32：奴才這個續妹妹却待奴才狠親熱，竟～他親哥哥一般，也因這上頭，他父親才肯留奴才住下。

[10] 男子：[名] 男子。《紅樓》2：見了～，便覺濁臭逼人。

[11] 婦人：[名]“成年女子的通称，多指已婚者” 既婚女性。《醒世》11：把～身上都仔細摸過。

[12] 雖然：[接] …だけれども。《兒女》9：況且父親的待我，～百般愛惜，教訓起來却是十分嚴厲。

[13] 死於非命：[成]“遭受意外灾祸而死亡” 非命の死を遂げる。《夷堅誌・甲誌》13：爾逐利忘家，致妻子～。

[14] 却：[副]“反而；然而” …なのに、却って。《水滸》29：一連數日，施恩來了大牢裏三次，～不提防被張團練家心腹人見了。

[15] 英風：[名] 氣概が大きい風格。《再生緣》2：～凜凜真非俗，壯誌堂堂果不凡。

[16] 正氣：[名] 公明正大な氣概。《正氣歌》：天地有～，雜然賦流形。

[17] 比：[動] 比較する、比べる。《史記・天官書》：危東六星，兩兩相～曰司空。

[18] 正命：[名]“泛指寿终而死。与‘非命’相对”天寿。《水滸》80：為惡黨者，此非～，深可憫焉。

[19] 更自：[副]“更加”さらに。[比較]“自”は語尾。《兒女》9：但是作姐姐的心事～不同，只可為自己道，難為知者言。

[20] 不同：[動]“不相同；不一样”違う。《甲子仲夏登署中樓觀海市》：遙岑相映帶，變幻紛～。

日本語訳

王貞という節操をよく守る女性は臨海県の人でした。賊に捕らわれたが、青風嶺を越える時、隙を見て崖より身を投じて死んだ。上帝は青風山夫人に冊封した。このような男性、女性は、たとえ非業の死を遂げても、その英雄の気風は天寿を全うした者とは一層違うものがあるのである。

原文

上天^[1]尊重^[2]他的品行^[3]，所以^[4]不必^[5]往^[6]那閻王跟前^[7]托生^[8]人世^[9]，竟自超凡入聖^[10]，為^[11]佛為神。就如朝廷^[12]破格^[13]用人^[14]一般^[15]，不必中舉^[16]中進士^[17]，竟與他做個給事中^[18]。

校注

[1] 上天：[名]天、天帝。《老殘》11：我常是不明白，～有好生之德。

[2] 尊重：[動]“敬重；重視”尊敬する、重んじる。《儒林》33：這老人家為人必定十分好，所以杜府才如此～報答他，為人須像這個老人家，方為不愧。

[3] 品行：[名]“人品德行”品行。《老殘》3：姚雲翁就將閣下學問怎樣，～怎樣。

[4] 所以：[接]したがって、だから。《遊褒禪山記》：此～學者不可以不深而慎取之也。

[5] 不必：[副]“无须；没有必要”…する必要がない。《文心雕龍・神思》：是以秉心養術，無務苦慮；含章司契，～勞情也。

[6] 往：[動]“去；到…去”行く。《兒女》8：又見那公子跪在地下，把他羞得面起紅雲，擡身～裏間就走。

[7] 跟前：[名]“面前；身前”そば、近く。《紅樓》23：你又在我～弄鬼。

[8] 托生：[動]“转世”生まれ変わる。《金線池》3：到如今各自～，我依舊安業著家，他依舊離鄉背井。

[9] 人世：[名]“人間；人类社会”この世。《二刻》13：我曾讀過野史，死人能起，喚名屍歷，也是～所有的事。

[10] 超凡入聖：[成]“凡人；普通人。超越平常人而达到圣贤的境界。形容学识修养达到了高峰”俗世間から抜け出し、聖人の域に達している。《紅樓》115：今日弟幸會芝範，想領教一番～的道理，從此可以洗盡俗腸，重開眼界。

[11] 為：[動]“变成；成为”…になる。《世說新語・自新》：終～忠臣。

[12] 朝廷：[名]朝廷。《為李公師祭袁石寓憲副》：公（袁可立子袁樞）之績用告成，而～之金甌不固。

[13] 破格：[連]“突破常规；不拘成格”破格である、前例がない。《論人才疏》：但論人不論官，官大者亦可小就，而後懸～之遷；官小者亦可大用，而後課非常之效。

[14] 用人：[動]“任用人才；使用人員”人を使う、人員を任用する。《三國誌・孫破虜討逆傳》：策為人，美姿顏，好笑語，性闊達聽受，善於～。是以士民見者，莫不盡心，樂為致死。

[15] 一般：[形]“一样；同样”同じ、同様の。《京本》：崔寧謝了恩，尋一塊～的玉，碾一個鈴兒接住了，禦前交納。

[16] 中舉：[動]鄉試に及第する。《答耿司寇》：故使克明不～，即不中進士，即不作大官，亦當為天地間有數奇品，超類絕倫。

[17] 進士：[名] 殿試に合格した者。《兒女》1：因此上自己一中～，就把這知縣看作了一個畏途。

[18] 給事中：[名] 官名。皇帝の側近の役割を担う。清代には天子を諫める役となった。

日本語訳

天の神様は彼らの品行を重んじるゆえ、彼らは閻魔王の所に行かなくても人の世に生まれ変わることができ、自から凡人の境涯を抜け出て、聖なる域に入り仏や神になる。これは、あたかも朝廷が破格に人を登用し、科挙試験で進士に合格しなくても、給事中という高官になれるようなものである。

原文

也不必甚麼中^[1]行^[2]評^[3]博^[4]，外邊的推^[5]知^[6]，留部^[7]考選^[8]，只論^[9]他有好文章做出來，就補^[10]了四衙門^[11]、清華^[12]之職的一般^[13]。

校注

[1] 中：[名] 中書。中国の漢代の官名。宮廷の文書・詔勅などを司る。

[2] 行：[名] 使者の官名。《管子・侈靡》：～可不有私。

[3] 評：[名] 官命刑罰を決める官吏。評事。

[4] 博：[名] 博士。秦の時から、古今のことを司らせた。

[5] 推：[名] 昔の官名。刑獄査問を司る。

[6] 知：[名] 府州の長官・知事に相当する者。

[7] 留部：[連] “留在中央” 中央に残る。

[8] 考選：[連] “接受选考” 試験を受ける。

[9] 論：[動] “衡量；評定” 見なす、評定する。《三國誌・顧譚傳》：時～功行賞，以為駐敵之功大，退敵之功小。

[10] 補：[動] “填充；补充” 補充する。《紅樓》4：小的聽見老爺～陞此任，系賈府王府之力。

[11] 四衙門：[名] 明代、吏部、翰林院、六科給事中と各道監察御史を指す。

[12] 清華：[形] 廉潔であり位の高い官職。《儒林》56：我朝太祖高皇帝定天下，開鄉會制科，設立翰林院衙門，儒臣之得與此選者，不數年間從容而躋卿貳，非是不得謂～之品。

[13] 一般：[形] “一样；同样” 同じ、同様の。《京本》：崔寧謝了恩，尋一塊～的玉，碾一個鈴兒接住了，禦前交納。

日本語訳

中書、行人、評事、博士や、地方の推官、知県は、普通は中央に残って試験を受け合格者となって初めて任用されるのであるが、試験を受けなくても、単によい文章を書くことができるならば、翰林院などの四衙門の高い職に任命されるようなものである。

原文

若是^[1]有^[2]那一等^[3]的潑皮^[4]的光棍^[5]，無賴^[6]的兇人^[7]，動不起^[8]拿^[9]了那不值錢^[10]的狗命^[11]圖賴^[12]人家^[13]，本等^[14]是牯虎^[15]嚇人^[16]，不料^[17]神鬼^[18]不容^[19]，弄假成真^[20]：原是^[21]假意^[22]抹頭^[23]，無意中^[24]便就^[25]抹死^[26]；假意上吊^[27]，無意中便就縊死^[28]；跳河^[29]跳井^[30]，原是望人^[31]拯救^[32]，不意^[33]救得起來^[34]，已是^[35]灌進水去^[36]，自己^[37]救不轉來了^[38]。

校注

- [1] 若是：[接]“如果”もしも…ならば。《水滸》23：～一日不來，我便對你武大說。
- [2] 有：[動]ある。
- [3] 一等：[數量]“一種”一種。[比較]これは旧白話語彙。《金瓶》4：又有～多人說…。
- [4] 潑皮：[形]“泼辣；刁頑”橫暴である、無頼である。《金瓶》73：俺每倒替你捏兩把汗，原來你到這等～。
- [5] 光棍：[名]“地痞；流氓”無頼漢、ごろつき。《金瓶》99：你是那裡來的～搗子，老娘就沒了親戚兒，許你便來欺負老娘。
- [6] 無頼：[名]“不講诚信的人”無頼漢、ごろつき。《官場》30：便道：他自己被賊偷了，還說是強盜打劫，要知縣賠他東西，豈非是～。
- [7] 兇人：[名]“凶惡的人”凶惡な人。《醒世》20：這是兩個出頭的光棍；其外也還有幾個膿包，倚負這兩個～。
- [8] 動不起：[動]ややもすれば…。[比較]《醒世》の特徴語の一つ。
- [9] 拿：[動]…で、…を用いて。
- [10] 不值錢：[形]“便宜；没有什么价值”値打ちがない。《金瓶》1：咱今日結拜了，明日就去拿他，也得些銀子使。西門慶道：你性命～麼。
- [11] 狗命：[名]“賤命；不高贵的性命”つまらない命。《官場》14：既然是你替他求情，我老爺今天就饒他一條～。
- [12] 圖頼：[動]“頼”人に罪をなすりつける。《清史》：福王登舟，將渡江，～扼江斷渡，明將田雄，馬得功以福王降。
- [13] 人家：[名]“別人；他人”他人。《紅樓》50：偏不巧，我正要作個媒呢，又已經許了～。
- [14] 本等：[副]“本来”本来、元々。《金瓶》78：比不的六娘，銀錢自有，他～手裏沒錢，你只說他不與你。
- [15] 粧虎：[動]“打扮成…”扮装する。《野叟曝言》31：這銀子給與張媽，須要妝龍像龍，～像虎方好。
- [16] 嚇人：[動]“给人以惊吓”驚かせる、怖がらせる。《鏡花》12：誰知此處也有這個風氣，並且還以相爺～。
- [17] 不料：[動]“没有想到”思いがけず。[比較]多く副詞的修飾語用。主語が前置されない。《官場》53：作揖之後，理應讓客人炕上上首坐的，～一個不留心，竟自己坐了上面。
- [18] 神鬼：[名]“神与鬼”靈魂と心霊。《西遊》87：道不離德，德不離道，兩者相需而相因，苟舍德而修道，有功無行，動有群魔，～不容，必蹉跎而難成。
- [19] 不容：[動]“不容許；不允許”許せない。《八仙得道》67：這事不但褻瀆貞女，且恐有傷老師自己品德，爲天神所～。
- [20] 弄假成真：[成]“把假的东西弄成真的”嘘が本当になる、嘘から出たまこと。《野叟曝言》50：罷了，真個～了。但須要醫好我女兒，若虛言脫騙，便與你性命相搏。
- [21] 原是：[副]“本来”もとは。《官場》25：不瞞潤翁說，我們家叔～一個錢不要的。
- [22] 假意：[名]“虛假，不真实的情意”偽りの気持ち。《金瓶》6：那婦人只得～兒謝了眾人。
- [23] 抹頭：[動]“自杀”自殺する。[比較]“砍头”は一般に他人に首を切られる事を指すが、“抹头”は自ら切る。《江湖奇俠傳》40：也就施展出自己的看家本領來，一劍刺到這人臉上，只聽得喳的一聲，

這人一～便向岸上逃去。

[24] 無意中：[連]“没有…的打算”故意ではなく、知らずに。《留東外史》1：一日，周撰到棧内會朋友，～與定兒見了一面，兩下裏都暗自吃驚。

[25] 便就：[副]“就”。すぐに。《今古》11：仲翔乘～將此書付之。

[26] 抹死：[動]“自杀”自殺する。《紅樓》46：就是老太太逼著我，我一刀子～了，也不能從命。

[27] 上吊：[動] 首を吊る。《官場》50：七姨東西賽如都偷完了，七姨在家裏急的要～。

[28] 縊死：[動]“上吊而死”首を吊って死ぬ。《西遊》12：臣將棄家舍子，因妻～，願來進瓜之事，說了一遍，他急差鬼使，引過我妻，就在森羅殿下相會。

[29] 跳河：[動] 河に身を投げて自殺する。《官場》30：沐恩常常聽見老一輩子的人講：大凡～自盡的人，一定是站在水裏的。

[30] 跳井：[動] 井戸に身を投げて自殺する。《花月痕》49：紫滄等馳人僞王府及各偽官衙署搜捕，也有吊死的，也有～跳池死的，也有吊不死跳不死給兵擒來的，也有就擒跑走的，也有跑走就擒的。

[31] 望人：[動]“指望別人”心待ちにする。《再生緣》21：才入詞林歸州府，又稱喉舌列皇儲。一時清～爭羨，共說朝端熱可知。季春十二又開篇，時值風和日暖天。

[32] 拯救：[動]“救贖”救う。《西遊》41：正欲設法～八戒出來，只聽那妖王叫道：六健將何在。

[33] 不意：[副]“没想到”思いがけなく。《綠野仙蹤》22：～一時失算，娶了個郭氏，弄出天大的饑荒，微幸掙出個命來。

[34] 救得起來：[動]“救得过来”救える。《水滸》8：林衝與泰山張教頭～，半晌方才蘇醒，兀自哭不住。

[35] 已是：[副]“已经”すでに。[比較]“是”は語尾。《鏡花》11：剛才我們一路看來，那些耕者讓畔，行者讓路光景，～不爭之意。

[36] 灌(進)水(去)：[連] 水を喉へ注ぎ込む、水を無理に飲ます。

[37] 自己：[代]“我”自分。《官場》32：余荇臣便說～當的是通省牙厘局總辦。

[38] 救不轉來(了)：[連]“救不过来”救えない。

日本語訳

もしも横暴なやくざ者や、ごろつきの悪人は、ややもすれば値打ちのないつまらない自分の命を以て、他人に言いがかりをつけたりする。本来脅す振りをするだけでも、思いもよらず靈魂と神靈が許さないもので、嘘が本当になる。本来冗談で首を切るまねをしていると、無意識のうちに本当に首を切ってしまう。首を吊るまねをしていれば、無意識のうちに本当に首を吊ってしまう。河や井戸に身を投げるにしても、元々は誰かに助けてもらうことを期待している。ところが、救おうにも、既に水を飲んでしまっていれば、自分でも救えない。

原文

那等^[1]悍妻^[2]潑妾^[3]，逆婦^[4]悍姑^[5]，或^[6]與^[7]婆婆^[8]合氣^[9]，或與丈夫^[10]反目^[11]，或是^[12]妯娌^[13]們言錯語差^[14]，或是姑嫂^[15]們競短爭長^[16]，或因^[17]偏護^[18]孩子^[19]，或因講說^[20]舌頭^[21]，打街罵巷^[22]，惡舍鬧鄰^[23]。那一等^[24]假^[25]要死的^[26]，原是^[27]要^[28]人害怕^[29]，往後^[30]再^[31]不敢^[32]惹^[33]他，好憑^[34]他上天入地^[35]的作惡^[36]，通^[37]似^[38]没有^[39]王子^[40]的蜜蜂^[41]一般^[42]，又與^[43]那没有猫管^[44]的老鼠相似^[45]。

校注

[1] 那等：[代] あのような。

- [2] 悍妻：[名]“凶悍的妻子”あばずれ妻。《續紅樓夢未竟稿（張曜孫）》13：又曾轉爲貧家女，後遇一貴公子，買爲侍女，遭～凌虐，愧恨而死。
- [3] 潑妾：[名]“泼辣的媳妇”あばずれ妾。《東度記》55：曲清見了，却認得是畏～，當初出外辭她之日動了淫心，如今只因僧人講了善惡，他却端正了念頭。
- [4] 逆婦：[名]“忤逆的媳妇”あばずれ嫁。
- [5] 悍姑：[名]“凶悍的女人”あばずれ娘。
- [6] 或：[接] 或いは。
- [7] 與：[介] …と。
- [8] 婆婆：[名] 姑。《狐狸緣全傳》15：俗語說打破了腦袋用扇扇，醜媳婦難免見～，既作泥鰍，不怕挖眼，總在洞裏藏著，亦是無益。
- [9] 合氣[géqi]：[動]“生气”意地になる、張り合う、喧嘩する、怒る。[比較][géqi]は方言音。
- [10] 丈夫：[名] 旦那さん。《再生緣》39：言訖佳人放了壺，輕敲檀板就低歌。唱成雙調天仙子，却是那，美女思春想～。
- [11] 反目：[動]“不和睦；翻臉”反目する。《東度記》43：或貪嫖賭拒妻言，或肆驕奢費產屋。奸盜邪淫總是非，致與妻兒成～。
- [12] 或是：[接]（複文に連用して）或は…、或は…。《紅樓》4：咱們這進京去，原是先拜望親友，～在你舅舅處，～你姨父家，他兩家的房舍極是寬敞的。
- [13] 妯娌(們)：[名]“兄，弟之妻的合称”兄の妻と弟の妻(たち)。《鏡花》81：不意這些黃泉，無根，生死字面，恰恰都出在他們～，妹妹，姑嫂六人之口，豈不可怪。
- [14] 言錯語差：[成]“言差语错”口喧嘩する。
- [15] 姑嫂(們)：[名]“小姑和嫂子”妻と夫の姉妹。《野叟曝言》152：宴玉兒等七人于月恒堂，並請珠娘～二人。
- [16] 競短爭長：[成]人の優劣を争う。《東度記》22：你却不如此，往往匹夫爲諒，～，不忍一朝，陡生五內，爲爭名也是，爲爭利也是，小不忍也是，報不平也是。
- [17] 因：[接]“因为”…なので。
- [18] 偏護：[動]“偏私袒护”肩をもつ、偏愛する。《姑妄言》20：若經了官，徒傷骨肉之情。知道的是他理虧，不知者還道是你～。
- [19] 孩子：[名] 子供。《紅樓》96：寶丫頭心地明白，是不用慮的。內中又有襲人，也還是個妥妥當當的～。
- [20] 講說：[動]“解释；说明”説明する。《金瓶》91：陶媽媽便道：小婦無事不登三寶殿，奉本縣正宅衙內分付，說貴宅上有一位奶奶要嫁人，～親事。
- [21] 舌頭：[名] 舌。《紅樓》26：我一時該死，你別告訴去。我再要敢，嘴上就長個疔，爛了～。
- [22] 打街罵巷：[連] 喧嘩の際、双方が自分の言い分を通行者に訴えて第三者の批判を求める。
- [23] 惡舍鬧鄰：[連]“損害，扰闹邻舍”隣近所・近隣を大騒がせる。
- [24] 一等：[數量]“一种”一種。
- [25] 假：[名]“真的反义词”偽(の)、(…の)振り。
- [26] 要死的：[連]“想要寻死的人”自殺しようとする人、死のうとする人。《紅樓》83：相近河邊，忽然竹林裏跳出一人，只戰了一合，將海裏鰍擒住，問道：這人是要活的，還是～。

[27] 原：[副]“本来”元々。《官場》6：王夢梅又把臉一紅，道：這蔣福～是一個朋友薦來的，說他如何可靠。

[28] 要：[動]“使；让”…させる。

[29] 害怕：[動]“恐惧”怖がる。《紅樓》10：寶釵忙問如何，忽見兩個媽子回說：方才瞧見婉姨娘的屍漸漸動彈了，要坐起來，咱們有些～。

[30] 往後：[名]“以后”今後。《紅樓》115：寶玉聽了這話，神色一變，把玉一撂，身子～一仰。未知死活，下回分解。

[31] 再：[副]再び、これ以上。

[32] 不敢：[連]…する勇氣がない。《再生緣》71：再講孟梁皇甫的奏摺，同見君王，一齊～上奏。

[33] 惹：[動]“招惹”相手を不快にさせる、気にさわるようなことを言う。《金瓶》21：西門慶道：我今日平白～一肚子氣，大雪裏來家，迺來告訴你。

[34] 好憑：[動]“可以任凭”好きに任せる。

[35] 上天入地：[成]“上天堂，入地獄。比喻无所不能，无所畏惧”隔たりが大きいこと。

[36] 作惡：[動]“做坏事”悪事をやる。《東度記》52：莫～。禁希笑道：怎麼莫作惡。

[37] 通：[副]“整体；全部”すべて、全く。

[38] 似：[動]…に似ている。[転]…のようだ。

[39] 没有：[動]“表示对存在的否定”無い。

[40] 王子：[名]女王蜂。

[41] 蜜蜂：[名]蜜蜂。《西遊》55：我進去時，變作～兒，飛入裏面，見那婦人坐在花亭子上。

[42] 一般：[形]“一样”同じである。《東度記》58：忽來到池塘之處，見二人在水裏相攪做一團，若似泗水～。

[43] 與：[介]“跟”…と。

[44] 管：[動]“管制；轄制”管理、管制。《水滸》10：你却不可躁暴，便去動手動脚，打攪了事，那時我不～。

[45] 相似：[形]“相像”…と似ている。《金瓶》6：只見紅日當天，忽一塊濕雲處，大雨傾盆～。

日本語訳

気の荒い妻や妾、反抗的な嫁や兄嫁は、姑と喧嘩をしたり、夫と反目したり、兄嫁たちと口喧嘩したり、おばたちと争ったりし、息子を溺愛するとか、デマを流したと言う理由で、街へ出て喧嘩し、隣近所を騒がせる。死ぬふりをする人は、もともと他人を怖がらせようとしていて、今後二度と気にさわるようなことを言わせないようにし、好き勝手に大変な悪事をやる。さながら女王蜂のいない蜜蜂か、猫がいない家のネズミのようである。

原文

就是^[1]那一等^[2]真个^[3]尋死的^[4]，也不過^[5]自恃^[6]了有強兄惡父^[7]，狠弟兇兒^[8]。借^[9]了他的人命^[10]爲^[11]由，^[12]好^[13]去打^[14]他的家私^[15]，毀^[16]他的房屋^[17]，尸場中^[18]好錐子^[19]割^[20]他，打官司^[21]耗散^[22]他的財物^[23]。懷^[24]了此等^[25]念頭^[26]，所以^[27]犯^[28]了鬼神之^[29]怒^[30]。

校注

[1] 就是：[接]たとえ…でも。ここでは“就是…也”という構文。

- [2] 一等：[数]“一种”一種。
- [3] 眞个：[形]“真正；确实”本當に。
- [4] 尋死的：[連]“想要自杀的人”死にたい(人)。《海上塵天影》13：大家疑心他～了，後來他的寡母，又死。
- [5] 不過：[連]“仅仅”ただ…にすぎない。
- [6] 自恃：[動]“自己依仗”自身…を頼みにする。《平山冷燕》13：山小姐～才高，又倚天子寵眷，一味驕矜，旁若無人。
- [7] 強兄惡父：[連]“强悍，凶惡的兄長和父親”強惡の父兄。
- [8] 狠弟兇兒：[連]“凶狠的弟弟和兒子”凶頑極道の弟とその息子。
- [9] 借：[動]“借助”借りる。《掃魅敦倫東度記》68：大王道：只恐子孫招敗時，依舊也去向人～。
- [10] 人命：[名]“性命”人命。
- [11] 爲：[動]“作为”…になる。
- [12] 由：[名]“原由；理由”理由。
- [13] 好：[助動]“便于”…するのに都合が良い。
- [14] 打：[動]“毀坏”壊す。
- [15] 家私：[名]“家具等財物”家具。《紅樓》32：王夫人道：在我屋裏搜～。平兒笑道：今兒太太們又出大分子。
- [16] 毀：[動]“毀坏”壊す。《孽海花》29：他們甘心做叛徒逆黨，情願去破家～產，名在那裏。利在那裏。
- [17] 房屋：[名]家屋、建物。《紅樓》40：不一會，劉大人那裏差人來收交～，東西。
- [18] 尸場中：[名]“人命案的現場”死体のある現場。《紅樓》86：前日～上薛蟠自己認拿碗砸死的，你說你親眼見的，怎麼今日的供不對。
- [19] 錐子：[名]錐。《九尾龜》134：他們吃把勢飯的，那一張嘴練得就像個純鋼～一般，翻來覆去的憑著他怎麼說法。
- [20] 割：[動]“刺”突き刺す。
- [21] 打官司：[連]“提起訴訟”訴訟を起こす。《水滸》52：這裏和他理論不得，須是京師也有大似他的，放著明明的條例，和他～。
- [22] 耗散：[動]“消耗；減損”消耗する。
- [23] 財物：[名]“財產”金錢や物資。《江湖奇俠傳》19：你家能夠多募化生～給我，我可替你家新要的小人，念一藏倒頭經。
- [24] 懷：[動]“心里存有”心にもつ。
- [25] 此等：[代]“這種”このような。《西遊》15：蒙活命在～久，更不聞取經人的音信。
- [26] 念頭：[名]“想法，主意”考え。《金瓶》86：我只怕一時被那種子設念隨邪，差了～。
- [27] 所以：[接]だから。《乾隆下江南》11：漁人道：此魚在春尚便宜，今暑天深潛水底，甚難取得，～一月下網，只獲此數尾，每條要賣紋銀五兩，已經有新任知府少爺月前預定，有卽送去，不論價錢的。
- [28] 犯：[動]“觸動；觸發”触れる。
- [29] 之：[助]“用于定语与中心语之间”…の。
- [30] 怒：[動]“怒氣”怒る。

日本語訳

たとえ本当に死のうとする嫁でも、ただ凶悪の父兄や凶頑極道の弟やその息子を頼みにするにすぎない。嫁の死を口実にすれば、夫の家具を壊しに行くのに都合が良いのである。夫の家屋を壊し、検屍現場で嫁の死体を錐のようにして夫の家に突き刺し、裁判訴訟を起こして夫側の財産を磨り減らすことができればよいと思っている。このような考えを抱くものだから、鬼神の怒りに触れるのである。

【主要参考文献】

- 董遵章，《元明清白话著作中山东方言例释》，齐鲁出版社，1993年。
白维国，《白话小说语言词典》，商务印书馆，2011年。
周定一，《红楼梦语言词典》，商务印书馆，1995年。
北京大学中国语言文学系语言学教研室，《汉语方言词汇》（第二版），语文出版社，1995年。
许宝华、宫田一郎，《汉语方言大词典》（全5册），中华书局，1996年。
《汉语拼音词汇》编写组，《汉语拼音词汇》（1989年重编本），语文出版社，1991年。
太田辰夫，《中国語歴史文法》，江南書院，1958年。
香坂順一，《『白話語彙の研究』》，光生館，1983年。
香坂順一，《『水滸』語彙と現代語》，光生館，1995年。
香坂順一，《『水滸』語彙の研究』》，光生館，1987年。
植田均，《『醒世姻縁傳』方言語彙辞典》，白帝社，2016年3月。

Notes to *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chapter 30.vol.1)

Ueda Hitoshi, Shi Liangliang, Sasaki Nao, Qiu Jie, Wang Tao, Wang Zhen, Ma Xuchao, Wang Haoxi

Xingshi Yinyuan Zhuan is a full-length novel with 100 chapters, written in Shangdong dialect. Its writer is from Shangdong Province but his name and life story still remain unknown. We annotate the words/ phrases the novel and include ‘comparison’ this time. Modern Chinese Research Class students from Kumamoto University are investigating all the words/ phrases occurring in the representative works produced in northern mandarin area in Qing Dynasty and currently are working on all the words/ phrases from *Xingshi Yinyuan Zhuan*. That is to say, the essay aims to expound ‘the rate of a certain word/ phrase corresponding to its meaning’, and researches on the quantitative linguistics with figures counting frequencies.

Textual Research of *Xingshi Yinyuan Zhuan* from Hu Shi (1993) and Huang Suqiu (1981) contribute greatly to the annotation. Recently the Historical Evolution of the Dialect of Xingshi Yinyuan Zhuan (Chao Rui, 2014) and Dialect Vocabulary Dictionary of Xingshi Yinyuan Zhuan (Hitoshi Ueda, 2016) have been published one by one.